

和歌披講博士「君が代」

和歌披講博士

別島升因

別島升因

Handwritten musical notation for the first system, consisting of a vocal line with lyrics and a rhythmic line below it.

Handwritten musical notation for the second system, consisting of a vocal line with lyrics and a rhythmic line below it.

譜 II (榊)

尻 上

Larghetto 莊重快活に tutti

歌

し

け

り

や

ひ

に

け

り

p

譜 I (庭火)

Handwritten musical notation for '庭火' (Iwa no Hi). The notation consists of two columns of vertical lines representing pitch contours. The right column includes the text '如字' (like character) and '向字不可唱' (cannot sing like character). Annotations include '切' (cut), '上' (up), '中' (middle), and '下' (down).

天文本梁塵秘抄「庭火」歌譜

Printed musical score for '庭火' (Iwa no Hi). It features six staves of music in bass clef with a 3/4 time signature. The score includes dynamic markings like 'Solo' and 'mf', and various musical notations such as slurs, ties, and ornaments.

さなくては無用の事也」

注15

意味の上で疑問のあるもの、又、母音音節「え」として「絶え」の

語を含むものがあるが、いずれも「と」＋「思ふ」の連続もあり、

語中音ということなど問題が残るが、扱わないことにした。又、私

的な分子をもつ歌集などは字余りの表記の点疑問があるものがある

ので八代集によった。

平安朝和歌の字余りは、句切を単位とすれば、母音音節の存在を句毎に見る場合の例外が多く解決出来、又、字余りが許されるのは誦しように当って単独母音の音節は、他の音節と別の一つの音節としていわない、方が出来たものと考えられることによる。この際には音節数の減少があるが、音節文字である平仮名表記に変化はない。一方に表意文字である漢字を持っているのであるから、実際の発音より意味の表現の方に傾くことがあつたかも知れないことが考えられる。音声表現を背後に持つ場合の平仮名表記はそれ／＼の性格に於て注意する必要があると思う。尚、「庭火」の「とやまなる」の「な」の前に「ん」の挿入がある。字足らずについても歌われる場合のことを考慮に入れば或種の音節との関係で考え得るようであるが、古代歌謡の場合他の事情もあるので別にみてみたいと思う。音声による表現はそのあり方によって一般のこととはかなり異つたものが見受けられることがある。(五十七年三月)

はむ(一八三〇)

一七三九は句切の点で疑問が残るが一八二七と共に同じ母音の連続があり、あとの二首は同じ音節の連続とみられるものがある。しかし左の十二首は例外となる。

岩。間。と。ぢ。し。氷も今朝は解けそめて苔のした水道もとむらむ(七)  
秋。の。露。や。袂。に。いたく結ぶらむ長き夜飽かず宿る月かな(四三三)  
露。は。袖。に。物。思。ふ。こ。ろ。は。さ。ぞ。な。お。く。か。な。ら。ず。秋。の。な。ら。ひ。な。ら。ね。ど

(四七〇)

をぐら山ふもとの里に木の葉散れば梢にはる、月をみるかな

(六〇三)

庭の雪にわが跡つけて出でつるを訪はれにけりと人やみるらむ

(六七九)

君いなば月待つとてもながめやらむ東の方の夕暮の空(八八五)  
世をいとふ人とし聞けばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ

(九七九)

思ひ置く人の心にしたわれて露わくる袖のかへりぬるかな

(九八八)

袖の露もあらぬ色にぞ消えかへる移ればかはるなげきせし間に

(一三三三)

野辺の露は色もなくてやこぼれつる袖よりすぐる萩の上風

(一三三八)

おのがなみに同じ末葉ぞしをれぬる藤咲く田子のうらめしの身や

(一四八〇)

ながめわびぬ柴の編戸の明方に山の端近くのこる月影(一五二四)

これには新古今に、万葉に多かった二句切、古今集に見られる三句切の外、初句切が総歌数の三分の一以上あり、四句切があり結果第五句の独立したかたちが生じたとか、体言止が古今集の約九倍に及ぶなど、声調の上の変化が著しいといわれていること、の關係でもあるのであろうか。これ等の歌の作者が二首を除き、西行・慈円・太上天皇であるのは、後に二條良基の「字余りに子細なき秀逸」<sup>注14</sup>でもあったのかも知れない。

体言の類は殆どが語頭に母音音節を持つもので助詞「の」につづくものが多く、歌枕など和歌によく使用される語に關係するものが多い。やはり前の語との關係で、誦する上でそれをひかせなくてもよかつたのであろうと思われる。譜Ⅲ「君が代」の披講の乙では、「さゞれ石の」の「石」の博士は一つである。<sup>注15</sup>

注 4 八番・左・盛方朝臣の歌について

注 5 「文字のあまる事」の条

注 6 約四十五例ある。

注 7 總角

注 8 八十七段「職の御曹司におはします頃」

注 9 紫式部日記・寛弘五年九月十五日の条

注 10 全 右、和歌披講の型の一応の成立は後冷泉朝

注 11 墨譜及和歌披講博士は平野健次・福島和夫編「日本音楽・歌謡資料集(楽譜総集篇)」中のもの、五線譜は芝祐泰「五線譜による雅楽総譜」より

譜」より

注 12 催馬楽にも母音について類似のことがある。

注 13 山井基清「催馬楽訳譜」・まえがき

注 14 近來風体抄「一、三十一文字よりあます事は秀逸の時は子細なし、

つてもし次の句とつゞけ一つの単位にまとめるならば、母音音節存在の例外とはならない。「思ふ」という語は「あり」「いう」「いづ」と共に、字余りの句中、使用例の特に多い語の一つであった。これらの語はいづれも意味からすれば希薄とでもいい得るもので、実際の使用に当ってはその内容をいう表現を必要とする。よって句切の最初にはあまり用いられなかったのではあるまいか。

句切ということになれば当然誦しいわれること、関係することが考えられる。当時の和歌はある場面に於てそれが述べられること自体に意義があるような性質のものではなく、ことばとしての意味がその時点に於て理解されることを必要とするあり、かたであったとみられるが、題材・発想には類型的なものもあり、かなり軽く目立ぬようにいわれどもさして差支がない部分があったのであろうと思われる。「歌をばさるものにて、こわづかひ注10ひのべじ」という「こわづかひ」の中にはこのような関係の配慮も含まれていたものと考えられよう。現在伝えられている神楽歌の類にはこのようなことを想わせるものがある。譜Ⅰ及び譜Ⅱに、「庭火」の歌譜（節博士によるもの）と五線譜、「榊」の五線譜の一部を示す。「庭火」では「みやまには」を「みや」には、「とやまなる」を「とやまんなる」、「榊」では「しげりあひにけり」を「しげりやひにけり」と歌い、母音を長く引く。注12尚、これらの奏せられる速度は、誦し言われるものよりはるかに遅いことが考えられようし、もとは一つのものであった和歌の披講が現在、冷泉・綾小路流の差を生じ、催馬楽に於て、墨譜（節博士）により伝わるものと、雅楽練習所で習ったものとは凡そ異なったものであった。注13というような変化はある筈である。しかし基本的な発声及び歌い方が伝え

られていれば、ことばを歌う際の参考にはなるのではあるまいか。この観点から見れば、同じ母音の連続は、「思ふ」は名詞「もの」・助詞「ぞ」・「と」などに、「いづ」は活用語尾イ段及び助詞「に」につくものが多いようである。一前の語の末尾の母音を長く延ばす場合、それに吸収していい得るものであり。又、一般に母音の連続は他に前の音節の母音につけて拗音的にいい、或は合一して別の母音に発音されることがあったと考えられる。同一の音節の連続も一方の音を際立たせたり長く延ばしたりして他方も吸収するかたちでいい得たかも知れない。「と」と「思ふ」の連続は、以上の理由で句切れを単位とし、特殊例とは考えなくてもよいと思う。古今・一〇四三は「でて」、後拾遺・一一〇七は「きき」の同じ音節の連続として扱って得るものがあり、金葉・六七一・六九一には漢語の「仏」があるが、「と」の連続とも見られよう。残る拾遺・九七二、後撰・三七八、千載・一二四三の中、拾遺のものについては異本によれば字余りではない。

ところで新古今では八〇・三四三・八八八・一一五二・一二九六・一三六一の六首は、字余り句の末尾「と」、続く句は「思ひ」ではじまっている。又、

たのみこしわが古寺の苔の下にいつしか朽ちむ名こそ惜しけれ  
(一七三九)

思ふべきわが後の世はあるかなきかなければこそはこの世には住  
め(一八二七)

老いにける白髪も花も諸共に今日のみゆきに雪と見えけり

(一四二〇)

いかゞすべき世にあらばやは世をも捨ててあなうのよと更に思

な。が。か。ら。じ。と。思ふ心は水の泡によそふる人のたのまれぬかな  
(拾遺・六三七)

空にみつおもひの煙雲とならばながむる人の目にぞ見えまし  
(拾遺・九七二)

墨染のいろはわれのみと思ひしを憂世をそむく人もありとか  
(拾遺・一三三三)

櫻花さかば散りなむと思ふよりかねても風のいとはしきかな  
(後拾遺・八一)

おなじくぞ雪積るらむと思へども君ふる里はまづぞ訪はる、  
(後拾遺・四一六)

捨てはてむと思ふさへこそ悲しけれ君になれにし我身と思へば  
(後拾遺・五七四)

あふまでや限なるらむと思ひしを恋はつきせぬ物にぞありける  
(後拾遺・七四七)

わすれなむと思ふさへこそ思ふ事はぬ身にはかなはざりけれ  
(後拾遺・七五九)

わすれなむとおもふに濡る、袂かな心なきは涙なりけり  
(後拾遺・七六〇)

み山木のこりやしぬらむと思ふまにいとどおもひの燃えまさる哉  
(後拾遺・七七三)

世の中にあらばぞ人のつらからむと思ふにしもぞ物は悲しき  
(後拾遺・七八四)

高砂とたかくないひそむかし聞きし尾上のしらべまづぞこひしき  
(後拾遺・一一〇七)

憐まむと思ふ心はひろけれどはぐくむ袖のせばくもあるかな  
(金葉・六三三)

あみだ仏となふる声に夢さめて西へかたふく月をこそみれ  
(金葉・六七二)

阿弥陀仏となふる声をかぢにてや苦しき海を漕ぎ渡るらむ  
(金葉・六九一)

わびぬればしひて忘れむと思へども心よわくも落つる涙か  
(詞花・二〇二)

美作やくめのさら山と思へども和歌の浦とぞいふべかりける  
(詞花・二八二)

いづかたに花咲きぬらむと思ふよりよもの山辺にちる心かな  
(千載・四二)

つれなきにいはで絶えなむと思ふこそあひ見ぬ先の別なりけれ  
(千載・六九七)

恋ひしなむ身は惜からずあふ事にかへむ程までと思ふばかりぞ  
(千載・七二九)

かくばかり憂身なれどもすて果てむと思ふになれば悲しかりけり  
(千載・一一一六)

たれもみな露の身ぞかしと思ふにも心とまりし草の庵かな  
(千載・一一三二)

武蔵野のほりかねの井もある物を嬉しくも水の近づきにけり  
(千載・一二四三)

以上の三十四首である。注意されることはその二十八例の字余り句  
の末尾「と」で、次の句の最初の語が「思う」であることである。よ

注3 長歌一首、旋頭歌一首のあることを示す。以下同じ

二

公任の新撰髓脳には「一字二字あまりたれども、うちよむ例にたがはねば癖とせず。凡そ歌は心ふかく姿きよげに、心におかしき所あるを、すぐれたりといふべし。」とあり、内大臣家歌合の俊頼の判には、

「五文字六文字有、七文字の八文字あるは常の事なり。それは聞きよきにつきてよむなり。是はあらはに余りたりと聞ゆれば、いかがあるべからん。」又、為家の詠歌一体では「させる要なく、あまらでもやすくやりぬべからん所に、わざとた、み入てあます事はわろし。いかにもあまさでかなふまじき時は、あまりたるもき、にくからぬはいくもじもくるしからず。」とあつて、「うちよむ例にたがはねば」「聞きよき」「聞きにくからぬ」といづれも音声で表現する場合のことを問題としている。平安朝では和歌はまずふみ即ち手紙に書かれるというところがあつた。一方、源氏物語などでは「ずす」「うちずす」「うちずんず」とあるもの、の半ばは和歌である。そしてそれは同じく源氏物語に「ことばのように聞え給ふ」とその述べ方が普通のそれとはちがうことをいうように、常の会話の言ひ方とは異なつたもので、枕草子に「ながやかによみいづ」とあるのによれば、長く引きのばしていうようなものであつたらしい。又、こわづかひのよいことも要求されたと見られる。

ところで字余りの句に母音音節が存在することは、母音連続という連音上に於ての事情であると思はれる。ではそれなくして許されてい

る字余りにはどのようなことがあるのであろうか。その特に多い新古今のものを除いて、それをもつ歌をあげる。

わびぬればしひて。忘れんと。思へども夢といふものぞ人頼めなる

(古今・五六九)

わすれなんと。思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ恋しき

(古今・七一八)

今はこじと思ふものからわすれつ、待たる、事のまだもやまぬか

(古今・七七四)

いでてゆかん。人をとめむよしなきに隣の方に鼻もひぬかな

(古今・一〇四三)

見る毎に秋にもなるかな。龍田姫もみぢそむとや山もきるらむ

(後撰・三七八)

忘れなむと思ふ心のやすからばつれなき人をうらみましやは

(後撰・七八一)

恋ひて。經むと思ふ心のわりなさは死にても知れよ忘れ形見に

(後撰・八二一)

今日そへに暮れざらめやは。思へども堪えぬは人の心なりけり

(後撰・八八三)

月にだに待つ程多く過ぎぬれば雨もよに。こじと思ほゆるかな

(後撰・一〇二二)

忘れなむと思ふ心のつくからに言の葉さへやいへばゆゆしき

(後撰・一一五三)

いとどしくいも寝ざるらむと思ふかなけふの今宵にあへる織女

(拾遺・一五二)



四 藤原公任・円位法師・道因法師

(三首―七名)

新古今 二五 西行法師 (94)

二三 前大僧正慈円 (91)

二一 読人知らず

一三 摂政太政大臣 (79)

九 藤原家隆 (43)・式子内親王 (49)・和泉式部・

皇太后宮大夫俊成 (73)

八 藤原定家 (46)・柿本人麿

七 太上天皇 (35)

六 紀貫之

五 寂蓮法師 (35)・殷富門院大輔・俊恵法師

(四首―五名、三首―十一名)

右のようであつて、その集に於ける歌数の多い作者に、字余りを含む歌の数も多い。

以上、平安朝の和歌(殆ど短歌)に於る字余りという現象は、特殊な作風などとは関係がなく、三十一文字という詩型と、当時の和歌の題材・着想など内容の面との間の言語表現の問題として考えられるということになる。

ところで字余りの句の中には、同一の語の使用がかなり多い。左に各集にそれを見る。(少ないものは省略する)

古今 字余り句 三〇二

あり 82 おもふ(思ふ) 54 いづ(出づ) 33 いふ(言ふ) 23

いろ(色) 8 うへ(上) 6 おく(置く) 6 うみ(海) 5

うう(植う) 5

後撰 字余り句 二九五

あり 92 おもふ 86 うへ 25 いづ 18 うみ 11 あふ(敢ふ) 6

いけ(池) 5 おふ(負ふ) 5

拾遺 字余り句 二七五

あり 83 おもふ 69 いふ 15 あふ(会う) 9 いづ 8

うへ 8 いろ 7 おも(面) 5

後拾遺 字余り句 一九四

あり 61 おもふ 43 いづ 22 いふ 7 うへ 7 うち 3

ありあけ(有明) 3

金葉 字余り句 七〇

あり 26 おもふ 12 いづ 7 うへ 4 おも 3

詞花 字余り句 四九

おもふ 19 あり 6 いづ 4

千載 字余り句 一七九

あり 51 おもふ 42 いづ 8 おく 7 ありあけ 5 いろ 4

うへ 4 うみ 4 おと(音) 4

新古今 字余り句 三八五

あり 70 おもふ 68 いづ 38 うへ 20 あふ 14 おく 11

いろ 10 いふ 9 うら 9 おも 9 ありあけ 7 おふ(生ふ)

7 やまおろし(山嵐) 6

右については、動詞「あり」・「おもふ」・「いづ」・「いふ」の使用が多く、この四つの語のみの合計で各集ともその字余り句の約五

〇%を占めることに注意される。

ということになる。

次に各集中の字余りの句を持つ歌数の多い作者とその歌数をあげる。

その集の代表作家とされているものについては、作者名の下の括弧内に所収総歌数も示す。

歌数 作者名

古今 九九 読人知らず (長1・旋1)<sup>注3</sup>

二一 紀貫之 (長1) (95)

一二 凡河内躬恒 (長1) (55)

一一 紀友則 (45)・在原業平

一〇 素性法師 (32)

七 伊勢 (長1) (22)

六 小野小町

五 壬生忠岑 (30)・平貞文

(四首―二名、三首―二名)

後撰 一二八 読人知らず

一九 紀貫之 (77)

一〇 伊勢 (69)

九 凡河内躬恒 (23)

四 藤原敦忠・紀友則

三 紀長谷雄・清原深養父・藤原守文・右大臣

藤原兼輔 (23)・元良のみこ

拾遺 八三 読人知らず

二八 柿本人麿 (103)

二〇 紀貫之 (107)

一一 大中臣能宣 (59)

一〇 清原元輔 (47)

八 凡河内躬恒 (34)

七 源順 (27)・藤原輔相 (37)・平兼盛 (38)

六 伊勢 (25)

五 恵慶法師

(三首―二名)

後拾遺 一七 和泉式部 (67)

八 読人知らず・相模 (40)

七 藤原長能 (20)

六 大中臣能宣 (26)・能因法師 (31)

五 赤染衛門 (32)・源道濟 (21)・中納言定頼

四 平兼盛・堀河右大臣・西宮前左大臣

(三首―五名)

金葉

八 読人知らず

五 春宮大夫公實 (20)

三 源俊頼 (36)・皇后宮肥後

三 読人知らず・曾根好忠 (17)・和泉式部 (16)・源俊頼 (11)

源俊頼 (11)

(二首―四名)

千載

七 俊恵法師 (22)・藤原季通・源俊頼 (長1)・

(52)

六 藤原基俊 (27)

五 藤原俊成 (36)

# 平安朝和歌の字余り

— 八代集にみる —

中村直子

和歌の字余りは、本居宣長の字音仮名用字格をはじめとして、<sup>注1</sup>句中に於る母音音節の存在がいわれている。音節数の規定による詩型である和歌にあって、どのような事情がそれを許しているのであろうか。

特殊例として取扱うには、それを持つ歌の数も多く、規則的であり過ぎるように思われる。字余りが問題とされるのは、訓釈の關係でまず万葉集があげられる。数もかなり多く発音については表記に使用されている漢字音の側からの助けを借りることが出来るが、<sup>注2</sup>訓みの確実性の問題があり、表現の環境・場面等については殆ど推測の域を出ない。よってそれ等のことがかなり補われる平安朝の和歌から見直しをみることにする。仮名用字格には「古今集ヨリ金葉詞花集ナドマデハ、此格ニハツレタル歌ハ見エズ、自然ノコトナル故ナリ、〔万葉以往ノ歌モ、ヨク見レバ此格也。千載新古今ノコロヨリシテ、此格ノ乱レタル歌ヲリク見ユ、西行ナド殊ニ是ヲ犯セル歌多シ〕」とある。平安朝の歌集にはその正雅な姿を代表するものとして、古今集から千載集までの七つの勅撰集があるが、それ等と共に後代の和歌の世界で重んぜられた新古今集を含めて扱うことにする。<sup>注2</sup>

注1 「又歌ニ、五モジ七モジノ句ヲ一モジ余シテ、六モジ八モジニヨム

事アル、是レ必中ニ右ノあいうおノ音ノアル句ニ限レルコト也、〔え

ノ音ノ例ナキハ、イカナル理ニカアラム、未レ考〕〔字音用字格〕。お

を所属弁)

注2

「本歌には堀川院の百首の作者までをとる也。同者名人の歌をとるべし。勅撰は後拾遺までをとるべしと申き。但今は金葉詞花千載新古今などを取たらんは、何かくるしかるべき」(二條良基・「近来風

体抄」)

最初に数の關係をみる。

字余りの句をもつ歌の、各歌集中の全歌数に対する割合は次のようである。(異本による相違のある場合は、字数の多い方、即ち字余りの方をとり、一首中に二句以上の字余りのあるものも一首と数える。)

	総歌数	字余り歌数	%
古今	一一一一	二五六	〇・二三
後撰	一四二六	二七八	〇・一八
拾遺	一三五一	二四九	〇・一八
後拾遺	一二二〇	一八五	〇・一五
金葉	七二六	六五	〇・〇九
詞花	四一一	四八	〇・一二
千載	一二八四	一六五	〇・一三
新古今	一九七九	三六〇	〇・一八

これによれば古今集は金葉・詞花・千載に比較し、割合にして約二倍であるが、その差は一〇%内外のことであり、歌風及び撰集の事情を考慮すれば、他の集と併せてむしろ斉一性の下に見るべきであろう。よって歌集の間に於ける字余りをもつ歌の割合には、さほどの差がな